

---

# もう少しだけ

小田原アキラ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

もう少しだけ

### 【Zマーク】

Z5088A

### 【作者名】

小田原アキラ

### 【あらすじ】

ずっと手を繋いでいて。安心できるまではずっと、手を繋いで傍にいて。あたしが欲しいのはそれだけ。最愛の人がいる彼に愛されることはないと分かっていながら、離れられないあたしのお話です。

ずっと手を繋いでいて。安心できるまでずっと、手を繋いで傍にいて。

あたしが欲しいのはそれだけ。

ゆっくり、指を握った。きつく握つたり、優しく握つたり、遊んでいるのに当の本人は夢の中に行っちゃって、全く気付かない。思わず顔が緩む。ソファーに寝つ転がる姿は相変わらず子供っぽい。悪戯好きのあたしが、何をしたって起きない。そういう可愛い彼を見せるのは、あたしだけじゃないのについつい喜んでしまう。手を握つても、握り返さないのに繰り返し、繰り返し手を重ねる。

「明美さんが来たら、どうするんだよ」

彼には、最愛の人がいる。それが彼の従姉妹の明美さんだ。あたしも何度か会つてゐるし、一人が相思相愛でしあわせそうに並んでる姿を何度も目にしている。そして、誰もそこに入れない。あたしはそれを知つてゐるのに、どうしても彼の側を離れられずにいる。彼しかしらない、彼しか愛せない。

その思いは時々、憎しみに変わることがある。このまま寝つて彼を閉じ込めて、ずっと寝顔を眺めていたい。そんな事考えてしまうのは、彼が優しすぎるから。あたしの傍になんて、いたくないくせに突き放すことができないんだ。優しいけど、それが辛いよ。だから憎い。時々、あたしは彼の喉元に手をかける。太くて、厚みのある首はあたしの両手でよつやく収めることができる。ゆっくり力を入れる。どのくらいまで力を入れると、死んでしまうのかな？ ぽんやり考えていると、彼の目がうつすらと開いた。

驚かなかつた。手もどけなかつたし、力も緩めなかつた。思つていたより、あたしは力を込めていない。本当は、憎くても殺したいとは思つてないから。それを彼も分かっている。

「知香」

小さくて、吐息に混ざるような苦しげな声で名前を呼ばれた。そこでようやく、あたしは彼の目の前でひどい顔をしているのに気付いた。涙が、視界を遮るように滲んで霞んでいく。彼の顔がよく見えない。

彼の手がゆっくりとあたしの手に触れた。

「触らないで。そんな風に、触らないでよ」

彼の首から手を離して、ソファーからはなれた。上着を着て、鞄を持つ。何しにきたのか分かんない。いや、分かってる。顔が見たかった。声が聞きたかった。名前を呼んで優しく触れてほしかった。それから、キスもしてほしい。でも、欲なんて持っちゃいけない。あたしが欲張れる立場じゃない。迷惑な存在なんだ。最愛の人ができるのに、彼の傍にいたくて無理矢理、隣に座るなんて。浮気なんとするタイプじゃない。そんな器用な人間じゃない。だけど、優しいからあたしを傷くけることができない。哀れだよ。

「・・・来てたなら、起こそせばいいのに」

あたしは彼に背を向けたまま、言った。

「疲れてたみたいだし、起こその悪いと思つてさ」

玄関まで、早足で歩く。といつて近い距離なので、数歩ですぐに玄関だ。

「せつかくだし、夕飯食べてく？」

靴を履いているのに、わざわざ気を使つ。そういうのも、優しさだね。

「いいよ。あたし手ぶらだから、せつかくの食材使うのもつたないいでしょ。貧乏学生」

彼が後ろで少し笑つた。その笑顔見たかったかも。そう思つて、振り向いても多分見れない。あたしは靴を履き終えると、息を吐いて彼に向きなおつた。

彼はあたしを見下ろしていた。玄関の段差で自然とそうなつてしまふだけなんだけど。

「じゃあ、またね」

彼は、おう。という軽い返事をしてあたしを見送った。マンションの分厚くて重い玄関を開けて、それから閉めた。閉まつてく扉の隙間から、彼の顔を見た。ちょっとだけ笑顔になつて。これも、優しさか。

閉まつて。何も見えなくなつてから、あたしは手で顔を覆つた。涙が瞳の中で、止まつたまま動かない。好きなのに、愛してるのは、彼の心はあたしのものじゃない。声をかけられるだけで、手が震える。話をするだけで、膝が崩れそうになる。触れられたら、心臓が止まつてしまいそうになる。

何もかもが、うれしい。だから、傍にいられるだけで幸せなんだ。でも、こんなこといつまでも続かない。いつか別れはやつてくる。きつとそう遠くない未来に。

だつて彼は結婚できる歳になつてゐし、明美さんの手には独占の証である指輪がついてる。あたしの指には、何もない。哀れだ。自分が哀れで、みつともない。

そろそろ、彼の部屋の前から立ち去るつと動き始めた時、キイという小さな音でドアが開いた。そうね、いつも通りだね。あたしのこと気づかつて、気にして、玄関の前で待つてたんだよね。

「寒いんじやない？」

「寒いよ」

「・・・昨日に誰かさんが持つてきたシチュー粉があるんだけど」あたしが黙つていると、彼はゆっくりあたしに近付いてきた。そんなに距離はない。手を伸ばせばすぐに腕を捕まえられるぐらいの位置に立つてゐる。

「それから、今朝に隣の野尻から野菜おすそ分けしてもらつたんだよね。実家から一年分は保たせるようにつてさ」

くすつと、笑つた。それからあたしの手を握つた。思わず肩が震えて、涙が流れるかと思つた。

「だから、お金の心配とかいらないんだ。それでも夕飯一緒に食べ

るのヤダ？」

「ヤジやない」

「じゃあ、作つてよ。俺のへぼ料理何回も食べてるだろ？」

そんな風に、誘わないで。誘惑に負けるのは、本気で好きだからなんだよ。その本気を、優しさで包むつとしないでよ。

繋いだ手に力を込めた。

それから、頷いて。震える体を動かして瘦けるように、前のめりに彼の体に抱きついた。

それでも体は震える。崩れてしまいそうだ。でも抱きとめてくれる彼の腕の中では、そんなこと考えられない。

好きです。こうして抱きしめられると、もう死んでもいいと思えるぐらい。こうして過ごす一人の時間は、二人だけのものだよね。こうして会ってる時間は、あたしだけの彼なんだよね。もう少し、もう少しだけあたしに時間を下さい。

ちゃんと、別れを理解できるまで。  
それまでこの手を離さないで。

## (後書き)

短編は苦手です。短いストーリーの中に入れたいことを詰め込むのは本当に苦手で、いつも短編にして出したい話は長くなることが多いです。今回も、うまくかけているかどうか、自分ではよく頑張った方だと思います。また、意見などありましたらなんでも書いてください。参考にさせていただきます。

ここまで読んで下さってありがとうございました。また短編を書けたらいいなあと思っています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5088a/>

---

もう少しだけ

2010年10月8日15時07分発行